

森、履歴書

もろ はな え
森 英 恵

①

ファッションの仕事に携わってこれこれ四十年。ファッションに対する世の中の見方は、随分移り変わったように思

ろ。

今でこそ、大きなメーカーとか銀行といったお堅い企業が、イメージ戦略を重視して、「ファッション、ファッション」

と声高に言うようになって、でも高度成長期のころの日本では、ファッションは女や子とが身につけるものとされ、社会の隅っこに追いやられていたのである。

もちろん、欧米ではそんなことはない。ファッション・デザイナーはアーティストとして尊敬され、ファッションがその国を語る大切な文化だ

という考えが定着していた。ただし欧米にはかつて別の意味の偏見があった。日本人は半モノを着て一生懸命になっていた。今でも

「粗雑な日本観覆そろう」

60年代、米の誤解に奮起

このころの多くなった現在と比べる

と、まさに今昔の感がする。この四十年間を改めてふり返ってみると、日本のファッションが子供から一人前の大人へと育っていく成長の歴史を身をもって生きてきたような気がする。その歩みは、たとえどしくて頼りなげなところが多い。でもいつも何かを乗り越えようと思つて一生懸命になっていた。今でも

このころのニューヨークのデパートでは、日本製の服はとてひどい扱いを受けていた。地階に並ぶブラウスはわずかに一がで売られていた。しかも質はとて粗末なものだった。その間、アメリカのことをとてよく勉強し、手本にまでしてきたのに……。

海外で初めてニューヨークを訪れ、そんな光景をまのあたりにしたとき、私はとてショックを受けた。「安かろう、悪かろう」が、日本製品の一般的なイメージだったの

海外で初めてファッションショーを夕方に行えた緊張が高まっていた。

あの子の縮むような緊張感は、単

に海外デビューを目前にしていたせいでではない。私はそのショーで大きな冒険をしようと思っていたのである。

そのころニューヨークのデパートでは、日本製の服はとてひどい扱いを受けていた。地階に並ぶブラウスはわずかに一がで売られていた。しかも質はとて粗末なものだった。その間、アメリカのことをとてよく勉強し、手本にまでしてきたのに……。

海外で初めてニューヨークを訪れ、そんな光景をまのあたりにしたとき、私はとてショックを受けた。「安かろう、悪かろう」が、日本製品の一般的なイメージだったの

海外で初めてファッションショーを夕方に行えた緊張が高まっていた。

あの子の縮むような緊張感は、単

に海外デビューを目前にしていたせいでではない。私はそのショーで大きな冒険をしようと思っていたのである。

そのころニューヨークのデパートでは、日本製の服はとてひどい扱いを受けていた。地階に並ぶブラウスはわずかに一がで売られていた。しかも質はとて粗末なものだった。その間、アメリカのことをとてよく勉強し、手本にまでしてきたのに……。

海外で初めてニューヨークを訪れ、そんな光景をまのあたりにしたとき、私はとてショックを受けた。「安かろう、悪かろう」が、日本製品の一般的なイメージだったの

海外で初めてファッションショーを夕方に行えた緊張が高まっていた。

あの子の縮むような緊張感は、単

に海外デビューを目前にしていたせいでではない。私はそのショーで大きな冒険をしようと思っていたのである。

そのころニューヨークのデパートでは、日本製の服はとてひどい扱いを受けていた。地階に並ぶブラウスはわずかに一がで売られていた。しかも質はとて粗末なものだった。その間、アメリカのことをとてよく勉強し、手本にまでしてきたのに……。

海外で初めてニューヨークを訪れ、そんな光景をまのあたりにしたとき、私はとてショックを受けた。「安かろう、悪かろう」が、日本製品の一般的なイメージだったの

海外で初めてファッションショーを夕方に行えた緊張が高まっていた。

あの子の縮むような緊張感は、単

に海外デビューを目前にしていたせいでではない。私はそのショーで大きな冒険をしようと思っていたのである。

そのころニューヨークのデパートでは、日本製の服はとてひどい扱いを受けていた。地階に並ぶブラウスはわずかに一がで売られていた。しかも質はとて粗末なものだった。その間、アメリカのことをとてよく勉強し、手本にまでしてきたのに……。

海外で初めてニューヨークを訪れ、そんな光景をまのあたりにしたとき、私はとてショックを受けた。「安かろう、悪かろう」が、日本製品の一般的なイメージだったの

海外で初めてファッションショーを夕方に行えた緊張が高まっていた。

あの子の縮むような緊張感は、単

に海外デビューを目前にしていたせいでではない。私はそのショーで大きな冒険をしようと思っていたのである。

そのころニューヨークのデパートでは、日本製の服はとてひどい扱いを受けていた。地階に並ぶブラウスはわずかに一がで売られていた。しかも質はとて粗末なものだった。その間、アメリカのことをとてよく勉強し、手本にまでしてきたのに……。



最近の筆者

一九六一年に初めてニューヨークを中へ育っていた。そのためには、百パーセント日本製の布地と、日本人の職人だけを使って、外国人が見たこともないようなきつなデザインを作り上げなければならない。初の海外ショーで、そんな企てを実行に移したのである。

しかもそのとき見たブッチーニのオペラ「蝶々夫人」の日本人女性のイメージがあまりにも惜げなかつた。男のいいなりになる哀れな女、両腕を前に組む中国風のしぐさをしている。畳の上を下駄をはいて歩くといった誤解がいたるところに見受けられた。

戦後十五年以上もたっていたというのに、アメリカの人たちは、まるで日本のことを知らない。日本人はアメリカのことをとてよく勉強し、手本にまでしてきたのに……。

ニューヨークで絶対、自分のオリジナルコレクションを発表してみせる。そして哀れな日本のイメージを変えたい。そんな決意が、いつの間にか若い私の心の

ファッション・デザイナー 川野も筆者